



# なじみの姿 定着はいつ？・

# 最終回 肖像の変遷をたどる

連載企画「GAM」ゲームのゲームの言葉に共通して取り入れら

今まで5回にわたってさまざまなゲームに登場する武田信玄の姿を取り上げた。個性豊かな信玄が描かれていた一方、赤い装束や毛の付いた兜、軍記など、多くは既存の物語を元にした要素も少なくなかった。こうしていった要素も少なくなかつた。こうしてたイメージがどのようにして定着したのか。山梨県立博物館学芸員の海老沼眞治さん(『頼尊真』)に考察してもらひたい。

現在もJR甲府駅前やJR塩山ろづか？

駅前の銅像など、県内のさまざま  
な場所で信玄の姿を見ることがで  
きる。ただしその姿は、鎧の上に法  
衣と袈裟をまとい、白や赤の毛の  
生えた兜をかぶり、手には軍配と  
いう、同じパターンの姿で表現され  
ているものが多い。この姿は、解説  
などがなくても私たちが一目で  
「信玄公だ」と認識できるほどに定  
着している。では、この姿は歴史的  
にどこまで遡ることができるのだ  
さかのぼる

ろうか？



【写真①】武田信玄像、部分、山梨県立博物館蔵。信玄の弟・逍遙軒が描いて高野山に奉納した絵の写本で、新たに確認された信玄生前の肖像として注目される。胴丸(どうまる)という当時の伝統的な甲冑(かっちゅう)をまとった姿で描かれる



治9（1876年）山梨県立博物館蔵。川中島合戦での信玄・謙信の一騎打ちを演じた歌舞伎俳優の役者絵。左が信玄で、四世中村芝翫（しかん）（1831～99年）が演じている。



【写真②】武田信玄像、土佐光起筆、元禄元(1688)年、部分、山梨県立博物館蔵。鎧の上に法衣と袈裟、白い毛の兜、手に軍配という、現在につづく典型的な姿で描かれた初期の肖像。土佐光起は江戸時代の土佐派を代表する絵師



【写真④】武田信玄信州川中島出張之図、歌川国芳筆、天保14～弘化4(1843～47)年、部分、山梨県立博物館蔵。信玄の顔に注目すると、ギョロっとした目つきで右目は上、左目は下を向く。口元には両端に牙のような歯が出ており、不動明王に通じる容姿となっている。

玄の姿として定着していったと考  
えられる＝写真③。

兜に軍配を持つおなじみの姿で描かれたものが多くなる＝写真②。どうやらこの頃に、現代に通じる信玄のイメージが完成したようである。そしてこのイメージは、18世紀後半以降に歌舞伎などの芸能や、絵本・浮世絵などの形で広まり、多くの人が共有することで、信玄の姿として定着していくと考えられる＝写真③。

◆◆◆

が少ないのではつきりとは分から  
ないが、いくつかの手掛かりをもと  
に考えてみよう。

江戸時代前期、17世紀に描かわ  
た「川中島合戦図屏風」から信玄の  
姿を探してみると、鎧と法衣・赤い  
毛の兜で太刀を持つ姿や、鎧と陣  
羽織・白い毛の兜で軍配を持つ姿  
が描かれている。どちらもイメージ  
に近づいてきているが、それぞれあ  
と一息、足りない要素もある。

江戸時代中期、18世紀前後にた

これらは、信玄の実際の容姿ではなく、信玄と不動明王を重ね合わせて作られたものと考えられているのだ。

以上のように、ひと口に信玄の姿といつても、さまざまなイメージが作られ、変化しながら人々に親しまれてきたことが分かるだろう。今回の企画では、ゲームに登場する信玄という視点から、さらに多くのイメージが生み出されていることが分かり、中には私たちが想像する姿とは異なるものも少なくなかつた。100年後、200年後には、果たしてどのような信玄像が定着しているのであるうか？ 翼味は尽きない。

これらは、信玄の実際の容姿ではなく、信玄と不動明王を重ね合わせて作られたものと考えられるのだ。



JR甲府駅南口の武田信玄公像  
昭和44(1969)年に建てられた